

朝 日 貝 塚 II

— 範囲確認試掘調査概要（2） —

1996年3月

水見市教育委員会

「朝日貝塚Ⅱ」正誤表

| ページ | 行 | 誤 | 正 |
|-----|----|-------------|------------|
| 1 | 14 | 第3章に記したように、 | (削除) |
| 2 | 20 | 今回調査を実施した | 初年度調査を実施した |

朝 日 貝 塚 II

— 範囲確認試掘調査概要 (2) —

1996年3月

氷見市教育委員会

序

富山湾に面し、海の幸、山の幸に恵まれた氷見市は、古くより人の生活の場として、数多くの文化遺産を育み、守ってきました。

特に、大正7年に調査された大境洞窟は日本で最初の洞窟遺跡調査として、同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として、学史にその名を留め、共に国指定史跡になっております。

このうち朝日貝塚は、大正13年の発掘調査で確認された住居跡の部分で、昭和30年に再掘され、覆屋が建てられ、見学ができるようになり、これまで活用されてきました。

しかしながら遺跡周辺は市街地に近接しており、遺跡の保護・活用をめぐる、新たな検討が迫られるようになりました。

これを受けて市教育委員会では、将来に向けて朝日貝塚のよりいっそうの保護・活用を図るため、3か年計画で遺跡範囲確認を目的とした試掘調査を実施することにいたしました。本年度はその第2年度であります。

調査にあたりまして、文化庁・富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センターをはじめ、多くの方々の協力を受けました。とりわけ、父子二代にわたって朝日貝塚を見つめ続けてこられた湊辰先生、北陸の縄文時代研究を通して朝日貝塚とも関わりの深い小島俊彰先生には、昨年度に引き続き、格別のご指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

氷見市教育委員会

教育長 江幡 武

目 次

| | |
|----------------------|---|
| 第1章 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2章 遺跡の環境と平成7年度調査の概要 | |
| 第1節 遺跡の地理的環境 | 2 |
| 第2節 遺跡の歴史的環境 | 2 |
| 第3節 平成7年度の調査 | 5 |
| 第3章 平成6年度の調査の成果 | |
| 第1節 調査の概要と順位 | 6 |
| 第2節 遺物 | 6 |

報告書抄録

目 次

| |
|----------------|
| 第1図 朝日貝塚口説明板 |
| 第2図 朝日貝塚と周辺の遺跡 |
| 第3図 平成7年度の調査地区 |
| 第4図 遺物実測図(1) |
| 第5図 遺物実測図(2) |
| 第6図 遺物実測図(3) |

表 目 次

| |
|------------------|
| 第1表 第2図の凡例 |
| 第2表 平成6年度出土遺物数量表 |

例 言

- 1 本書は、平成7年度に実施した、富山県氷見市朝日丘所在の朝日貝塚の範囲確認試掘調査の概要報告である。
- 2 調査は国庫補助事業として、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、文化係長西井紀夫・主任池田秀正が調査事務を担当し、課長島勝彦が総括した。また課長代理井波映朗・主任池田幸代・社会教育主事高野弘文の協力を得た。
- 4 調査は、氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員鈴木瑞廣と同大野究が担当した。
- 5 本書の編集・執筆は、鈴木瑞廣の協力を得て、大野究が担当した。
- 6 調査及び本書の作成にあたって、以下の機関・個人から指導・協力・参加をいただいた。記して感謝申し上げる(順不同・敬称略)。
富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・氷見市文化財審議会・湊晏・小島俊彰・岡部助信・中居敏弘・中居武次郎・谷畑喜三松・三浦知徳・二欠忠京・伊藤文代・関谷明美・嵩尾朋昭
- 7 出土遺物と調査にかかわる資料は、氷見市立博物館が保管・管理している。
- 8 なお、本書には平成6年度の成果を中心に掲載したが、その調査の概要や図版等については、『朝日貝塚1』もあわせて参照いただきたい。

第1章 調査に至る経緯

朝日貝塚は、大正7年に発見され、同11年に史跡に指定された遺跡である。

一般には日本海側の数少ない縄文時代の貝塚のひとつとして周知され、わが国で初めて発掘調査によって住居跡が確認された遺跡、代表的な縄文土器のひとつである「バスケット型土器」の出土した遺跡、重要文化財硬玉製大珠の出土した遺跡、あるいは北陸の縄文時代前期の標識遺跡などとして知られている。

地元では、同年に発見された大境洞窟とともに、氷見を代表する遺跡として親しまれ、昭和初期には出土遺物の一部が地元に戻還される一方、昭和30年には住居跡に保存舎が建てられて見学ができるようになるなど、遺跡の活用においても先駆的な遺跡として評価できよう。

しかし、遺跡は市街地に近接し、発見以後周囲には徐々に住宅・事業所などが立ち並ぶようになってきた。近い将来、遺跡の保護と開発事業との間で軋轢が生じるのは、必至のことと思われる。

そこで問題となるのは、遺跡の範囲である。

第3章に記したように、指定地の範囲は大正7年と同10年の発掘調査の成果をもとに確定されたが、これは主として貝層の範囲をおさえたものと思われる。

その後漢農氏によって指定地はA地点とされ、さらにB地点・C地点・D地点が追加された。また、その後の調査によりA地点の貝層が指定地の南側にも広がる事が確認されている。

一方朝日貝塚を縄文時代だけではなく、弥生時代・古墳時代・古代・中世との複合遺跡としてみたとき、その範囲はさらに広がると考えられる。

これらの状況を受けて、氷見市教育委員会は朝日貝塚の範囲を確認するために、平成6年度から3カ年、国庫補助事業として試掘調査を実施することにした。



第1図 朝日貝塚旧説明板（氷見市立博物館所蔵写真）

一この説明板は昭和30年代頃まで保存舎前に掲示されていた一

第2章 遺跡の環境と平成7年度調査の概要

第1節 遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230㎓、人口は約6万人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り、山間部では地滑りが多い。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまった平野が少ない。市南半部は、かつてラグーンであった平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は、海岸線のほぼ中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶJR氷見線が通り、主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・三次産業就業者が多く、高岡市などの市外へ通勤する人が多い。

一方、能登半島入口の観光地として、市内には旅館・民宿が立ち並び、近年は温泉も市内各地で噴出している。

朝日貝塚の所在する朝日丘地区は、市街地の南西部にあたる。遺跡西側は市域中央を西から東に向ってのびる朝日山丘陵の東南裾であり、ここから東側の湊川まで緩やかな斜面になっている。標高は丘陵標で約7m、今回調査を実施した最下段の水田で約1.2mであり、湊川の水面はほぼ海水面の高さにあたる。

国指定地は誓度寺境内と畑地、周囲は宅地・道路・畑地・水田などとして利用されており、感覚的には「市街地の中の取り残された一角」と言えよう。

第2節 遺跡の歴史的環境

朝日貝塚の周囲は市街地であるため、これまで大規模な発掘調査はなく、点的に遺物の出土が知られるのみである。

縄文時代では岩上遺跡があり、前期～後期の資料が出土している。一方十二町湧掛水機場遺跡からは、前期前葉頃の資料が採集されている。また、朝日水源地遺跡では後晩期の資料が出土している。

弥生時代では、岩上遺跡で大型石包丁が採集されているが、詳細は不明である。

古墳時代では、朝日山丘陵に朝日長山古墳・朝日高山古墳群・朝日谷内横穴がある。このうち6世紀前葉の朝日長山古墳は、前方後円墳と考えられ、県内で数少ない円筒埴輪をめぐらし、武器・馬具・冠帽片などが出土している。また朝日高山1号墳は、測量調査によって全長約33

mの前方後方墳と考えられている。

古代では、岩上遺跡で須恵器・土師器・瓦塔などが採集されているが、詳細は不明である。また江戸後期の「応響雜記」には著者田中屋権右衛門宅の庭（現在の氷見市民会館のあたり）から須恵器壺が出土した記事がある。

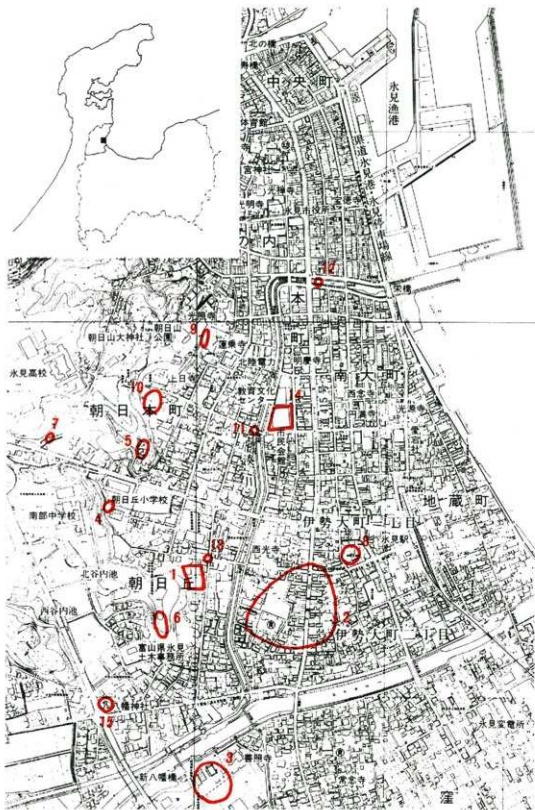
中世では、伊勢玉神社・蓮乗寺・上日寺・朝日橋詰・中の橋近くの川底から石造物や珠洲などが出土している。また朝日十字路遺跡では、珠洲壺に入った唐・宋・明銭など6488枚が出土している。

このように、市中心部の歴史はまだ未解明の部分が多い。それは原始・古代にとどまらず、例えば中世においても文献資料から氷見町は14世紀中頃には成立していたと思われるが、考古資料からはそれを説明するほどの資料の蓄積はまだない。

こうした状況を思い合わせると、大正11年という早い段階で史跡として周知されたことにより、朝日貝塚とその周辺の地域が「取り残された」意義は大きく、地域の歴史を垣間見る窓として一層の保護・活用が望まれよう。

第1表 第2図の凡例

| 番号 | 遺跡名など | 主な時代 | 主な出土遺物 |
|----|-------------|----------|-----------------|
| 1 | 朝日貝塚(国指定範囲) | 縄文～中世 | 縄文土器・石器など |
| 2 | 岩上遺跡 | 縄文・弥生・古代 | 縄文土器・大型石包丁・瓦塔など |
| 3 | 十二町湯排水機場遺跡 | 縄文 | 縄文土器・石器など |
| 4 | 朝日水源池遺跡 | 縄文 | 縄文土器 |
| 5 | 朝日長山古墳 | 古墳 | 鉄刀・杏葉・冠帽片・須恵器など |
| 6 | 朝日高山古墳群 | 古墳 | |
| 7 | 朝日谷内横穴 | 古墳 | |
| 8 | 伊勢玉神社中世墓 | 中世 | 五輪塔・板石塔婆・珠洲など |
| 9 | 蓮乗寺中世墓 | 中世 | 珠洲 |
| 10 | 上日寺中世墓 | 中世 | 五輪塔・板石塔婆・珠洲など |
| 11 | 朝日橋詰遺跡 | 中世 | 五輪塔など |
| 12 | 中の橋敷布地 | 中世 | 石仏 |
| 13 | 朝日十字路遺跡 | 中世 | 珠洲・古銭 |
| 14 | 田中屋権右衛門旧宅 | | |
| 15 | 雀森 | | |



第2図 朝日貝塚と周辺の遺跡 (1/10,000)

第3節 平成7年度の調査

朝日貝塚の範囲を知る上で重要なことは、周囲の遺跡との関連であろう。朝日貝塚それ自体もA・B・C・Dの各地点に分かれるが、さらにその周囲には縄文時代の遺跡として朝日水源地遺跡（中期末～晩期）・岩上遺跡（前期末～中期）が所在している。このうち本年度は、朝日貝塚東側に湊川をはさんで所在する岩上遺跡との関連に注目した。

岩上遺跡は市街地の中ということもあり断片的ではあるが、古くから遺物が散布することが知られており、縄文時代から中世にかけての長期間にわたる遺跡として周知されている。昨年度の埋蔵文化財詳細分布調査でも、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・越中瀬戸など多数の遺物が採集された。

このうち昭和50年には、現在の上伊勢保育園の建築工事に先立ち、約100㎡の発掘調査が実施され、縄文時代前期末から中期にかけての遺物が出土している。

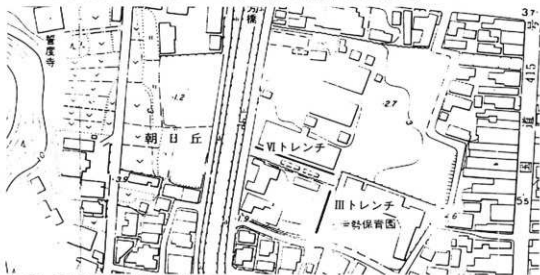
そこで本年度は、両者の関連を確認することを目的とし、第3図のように2カ所の試掘調査を実施した。

Ⅲトレンチは、上伊勢保育園の西隣の畑地、Ⅳトレンチは、氷見市車庫南側の空地に設定した。調査面積は合わせて約200㎡である。

調査の結果、ⅢトレンチとⅣトレンチ東側では、地下約90cm前後で遺構面を確認したが、Ⅳトレンチ西側ではこの面は確認されなかった。遺物もⅢトレンチとⅣトレンチ東側では縄文土器・中世土師器・珠洲が出土したが、Ⅳトレンチ西側では全く遺物の出土がなかった。

従って、朝日貝塚と岩上遺跡は、湊川で区分されることが確認された。ただし、この結果は限られた調査区域に対する人力による調査の結果であり、将来的には湊川川床を含め、広い範囲での確認が望まれよう。

なお、今年度の調査の詳細については、次年度の報告書でまとめたい。



第3図 平成7年度の調査地区 (1/2,500)

第3章 平成6年度調査の成果

第1節 調査の概要と層位

概要と層位については、『朝日貝塚Ⅰ』に記しているのですが、ここでは簡単にまとめておく。

平成6年度は、国指定地であるA地点と、昭和6年の発掘調査で遺物包含層が確認されたD地点の中間に位置する水田を調査対象地区とし、両者のつながりを把握することを目的に、試掘トレンチを2カ所設定した。

調査対象地区は、氷見市朝日丘134～137・139番地の水田1,500㎡で、ここにⅠトレンチとⅡトレンチを設定した。調査期間は平成6年12月2日から平成7年3月24日までの延べ42日間で、発掘面積は約100㎡である。

調査を行った水田は、土地改良の時に西側の土を東側に盛り直している。

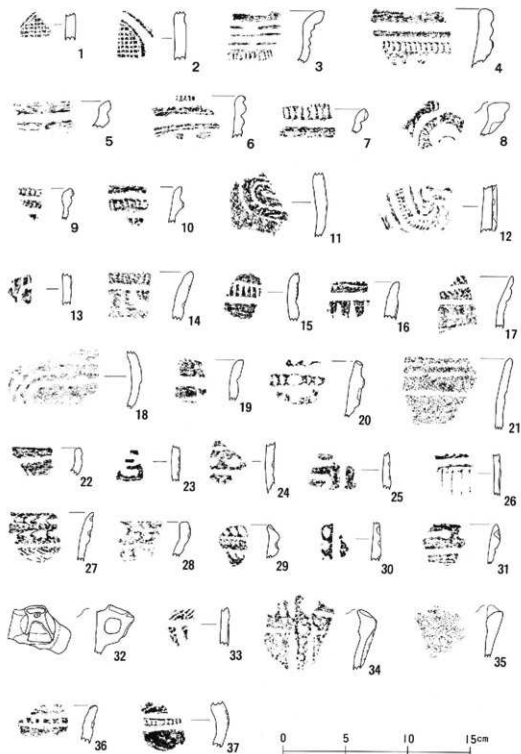
今回調査の主力をおいたⅠトレンチ南側とⅡトレンチ東側は、約40cm盛り土された部分に当たり、この下に旧水田を確認できた。調査では、盛り土部分からも遺物が出土した。旧水田以下の地層は、粘質砂層であり、地下水位が高い。

第2節 遺物

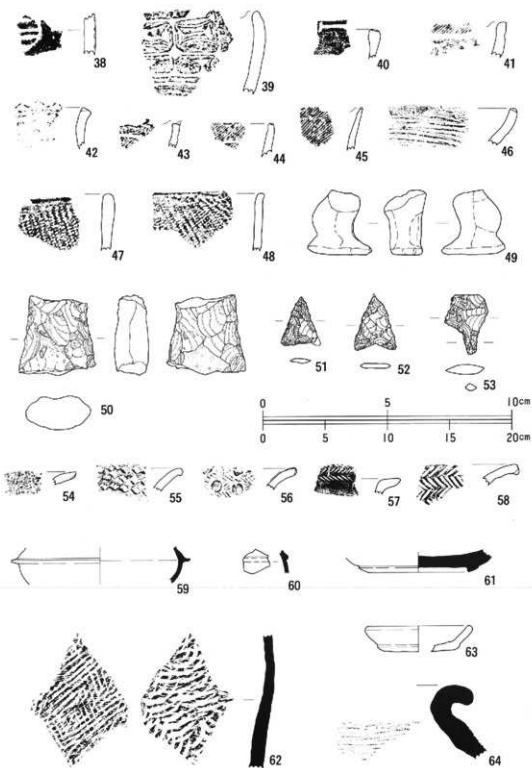
出土遺物は、縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・珠洲・陶磁器・土錘・銅銭・動物骨などであり、数量は第2表の通りである。このうち、主要な76点を図化した。

1～48は縄文土器である。いずれも破片で全形を知りうる資料はない。

1・2は、半陸起線による格子目文を施した胴部破片であり、前期後葉朝日下層式のものである。なお今回の調査で出土した朝日下層式の上器は、この2点のみである。3～12は、隆帯や半截竹管文を施した中期中葉の資料である。3～7・9・10は平縁の深鉢の口縁であり、8は波状口縁、11・12は胴部破片である。3・4・6～10・12は隆帯に刻目を入れる。13～15は中期後葉の資料である。13は沈線、14・15は貝殻圧痕と沈線により文様が施される。16～19は中期後葉末の資料である。17は貼付隆帯に縄文を施す。また貼付隆帯に刻みを入れた20もこの時期か。21～26は後期前葉前田式の資料である。21・22は平縁の深鉢口縁であり、平行沈線を施す。23～25は胴部破片で、S字状沈線や列点などを施す。26は微陸起線文を施すものである。27～34は、後期前葉気屋式のものである。27・28は平縁の深鉢口縁で、三角刺突文を施す。29～31は棒状具による圧痕と沈線が施された胴部破片。32は把手部分。33は縄文帯の下に沈線文を施したものの。34は棒状具で圧痕を施した波状口縁の深鉢である。35・36は後期加曾利B1式のものか。36は平行線と刻み目文を施す。37は内面未調整の破片であり、注口土器か上側の可能性もある。時期は後期か。38は沈線による文様を施す。後期末か。39～41は晩期前葉御経塚式のもの。39は波状口縁の深鉢であり、工字文と沈線を施す。40は口縁端部にT字文を施す。41は磨消縄文の浅鉢口縁か。42～46は晩期中葉中層式のものである。42は口縁端部に山型文を施す。43～45は縄文帯を施した口縁部。46はくの字型の深鉢で、条痕文を施す。47・48はR L



第4圖 遺物実測圖(1) 縮尺1/3



第5図 遺物実測図(2) 縮尺1/3、51~53は2/3

の縄文を施した深鉢口縁である。

49は土偶の脚部である。胎土に砂粒を多量に含むが、堅緻な焼成である。接合部が整形されていることから、脚部はこの単位で製作され、胴部に接合されていたのであろう。

50は打製石斧の破片である。石材は不明。51は凹基無茎の石鏃である。長さ1.95cm、残存幅1.4cm、最大厚0.25cmで、石材は玉髄か。52は凹基無茎の石鏃である。長さ2.2cm、幅1.7cm、最大厚0.2cmで、石材は安山岩である。53は石錐である。長さ2.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmで、石材は玉髄である。

54～58は弥生時代中期の土器である。口縁内側に、54は竹管状刺突文、55～58は櫛目刺突文を施す。56はさらに円形の土版を貼り付ける。

59・60は古墳時代後期の須恵器である。59は受部径14.4cmの杯もしくは有蓋高杯である。胎土に砂粒はほとんど含まず、焼成は堅緻良好で、青灰色を呈する。60は杯蓋である。

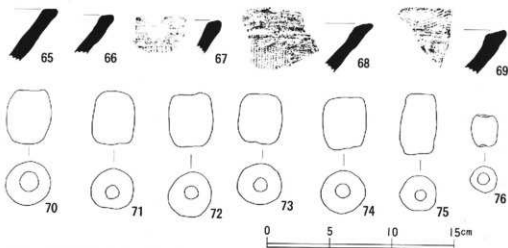
61・62は古代須恵器である。61は台径8cmの杯の底部であり、外部はヘラ切り未調整である。奈良時代のものである。62は甕の胴部破片である。

63は中世土師器皿である。手づくね整形で口径8cm、器高2.1cmである。15世紀中頃のもの。

64～69は中世珠洲である。64は甕の口縁部破片である。吉岡福年（吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館）のⅡ～Ⅲ期、13世紀のもの。65～69はすり鉢である。65～67は吉岡福年のⅣ期、14世紀前半～中頃のもの、68・69はⅤ期、14世紀末～15世紀のものである。

70～76は古代～中世の土錘である。重量は順に42g、44g、54g、44g、46g、36g、10gである。なお、銅銭は紹定通宝・太平通宝・皇宋通宝・元祐通宝・不明の計5枚である。

以上、平成6年度調査地区では、縄文時代前期後葉～晩期中葉、弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代、13世紀～15世紀の資料が出土した。



第6図 遺物実測図(3) 縮尺1/3

第2表 平成6年度出土遺物数量表(破片数)

| | 縄文土器 | 弥生土器 又は土師器 | 古墳時代 古瓦 | 古代須恵器 | 珠洲 | 中世土師器 |
|--------|--------|---------------|------------|-------|-----|-------|
| Iトレンチ | 546 | 2,906 | 0 | 61 | 66 | 6 |
| IIトレンチ | 1,106 | 7,302 | 2 | 148 | 50 | 24 |
| | その他陶磁器 | 石 鏝 | 石 鏝 | 打製石斧 | 剥片等 | 土 鏝 |
| Iトレンチ | 91 | 1 | 0 | 0 | 38 | 0 |
| IIトレンチ | 149 | 1 | 1 | 1 | 39 | 10 |
| | 銅 銭 | 動物骨等 | その他 | 合計 | | |
| Iトレンチ | 0 | 3 | 3 | 3,721 | | |
| IIトレンチ | 5 | 9 | 4 | 8,851 | | |

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------|------------------------------------|--------------------|------|-------------------|--------------------|---------------------------|----------------|------|
| ふりがな | あさひかいづか2 | | | | | | | |
| 書名 | 朝日貝塚II | | | | | | | |
| 副書名 | 範囲確認試験調査概要 | | | | | | | |
| 巻次 | 2 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 氷見市埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第21冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | 人野究 | | | | | | | |
| 編集機関 | 氷見市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒935 富山県氷見市本町4番9号 TEL 0766-74-8215 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 1996年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | m ² | |
| 朝日貝塚 | 富山県 氷見市 朝日丘 | 16205 | 56 | 36° 50' 40" | 136° 59' 15" | 19951201 ↓ 19960326 | 200 | 範囲確認 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 朝日貝塚 | 貝塚 集落 | 縄文・弥生・古 墳・古代・中世 | | 溝・穴 | 縄文土器・中世 土師器・珠洲 | | | |

平成8年3月25日 印刷

平成8年3月31日 発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第21冊

朝日貝塚Ⅱ

遺跡範囲確認試掘調査(2)一

編集・発行 氷見市教育委員会
〒955 富山県氷見市本町4番9号
☎0766(74)8215

印刷 ㈱ひふみ印刷社